

藩領人口と城下町人口

西村 睦男

はじめに

封建社会の中心地であった城下町（あるいは陣屋所在町）の人口が、藩石高あるいは藩領内人口に対して、どのくらいの割合を占めていたか。これを明らかにしてみたいというのが、本稿の目的である。

封建社会では、矢崎武夫もいうように「各藩は他領に販売する特産物はあったが、自給を原則とし、都市の構成要素は特定なものに偏せず、生活に必要なあらゆるものを包含しなければならなかったから、各城下町を通じて産業構成には一定の型があって相互に大きな相違はなかった」と考えられる。また、産業の分化が進んでいなかったから、都市機能の構造も現在に比べれば単純であった。さらに、城下町を支える最も重要な構成要素であった武家人口は、ほぼ藩石高に正比例しており、また城下町における武家人口と町屋人口の割合も、だいたい等しかったと報じられているから、領内人口と城下町人口の間には一定の割合が存在するのではないかということが考えられる。

城下町人口と藩石高との関係については、つとに藤岡謙二郎が先駆的研究を行なった。ただし、そこで取り扱われたのは、その研究目的に応じたものとして、昭和25年現在の城下町出身都市の人口であった。本研究では、封建時代における城下町人口と藩石高・領内人口との関係を問題にするが、それについては矢守一彦の研究があり、それによって、すでに次のことが明らかにされている。すなわち、城下町規模と藩石高、城下町規模と領内人口との間には正の相関関係がみられるが、この相関傾向線に必ずしも沿わないケースもあり、後者の生じる原因には

次のようなことが考えられている。(1)東北および西南の諸藩、とくに居付の大藩に顕著にみられた地方知行制をしいたところは、蔵米給与制の藩に比べて、城下町人口率が低くなる。(2)鹿児島、熊本、高知、仙台などのように郷土制度の存続した藩では、武家人口率は高いが、郷土は城下町に居住しなかったから、城下町人口率は低くなる。(3)たとえば篠山、宮津、豊岡、出石、大溝などのように、四囲に有力な経済都市を持たなかったところは、経済的中心地としての城下町の役割が大きくなるため、藩石高の割には城下町の人口規模が大となる。(4)藩領が飛地になって分散している場合は、城下町人口規模が小となる。(5)水口、岡崎などのように、城下町が宿場町を兼ねているところは、城下町の人口規模が大となる。

矢守論文によって、これらのことが明らかにされているにもかかわらず、なお城下町人口と藩石高・領内人口との関係を問題にしようとするのは、二つの理由による。一つは、矢守論文では、畿内における城下町規模と藩領規模との関係の考察が中心になっているが、これを拡大して、考察を全国すべての藩に及ぼしてみたいということである。また、矢守論文では領内人口として関山直太郎の「近世日本人の研究」の付録表「府藩県別・身分別人員表」が使用されているが、これには本領人口と飛地領人口の区別がない。もっとも、矢守論文では淀、郡山、高槻の各藩について飛地についての考察が加えられているが、全国すべての藩について本領人口と飛地領人口とを区別してみて、本領人口と城下町人口との関係がどうなるか、これを知りたいということが、いま一つの理由であった。

このような理由から、全国すべての藩を通じ

て、城下町人口と藩石高・藩領総人口・本領人口との割合が分析されるが、本稿では分析の結果のみが報告され、それをもたらした原因は何かということについてはほとんどふれられない。それは、今後の課題である。

I 資料とその用途

1) 石高

各藩石高については、河出書房版『日本歴史大辞典、別巻』⁶⁾により、廃藩置県時の石高を用いた。ただし、東北諸藩などのように、明治に入って石高に大きな変化があったところは、文化10年(1813)の石高を適用した。なお、1万石クラスの小藩のなかには、領内人口が的確につかめないものがあつたので、これらは省略されている。その結果、ここで分析の対象となつた藩の総数は222となつた。

2) 領内人口

関山直太郎の『府藩県別・身分別人員表』については、その出典が記されていないが、これは資料の標題から推察して、廃藩置県当時、明治政府によって作製されたものと考えられる。この資料には、各府藩県別に、その人口が華・士・卒族、平民、その他に分けて記録されている。しかし、この資料では飛地領人口がわからない。また、この資料は、佐賀、長岡、浜松、掛川、田中、横須賀、高須、今尾、福本、多度津各藩の記載を欠いている。そこで、本研究ではこの資料を利用するとともに、この資料に欠落している藩を補い、また飛地領人口と本領人口とを区別して把握するため、⁷⁾『旧高旧領取調帳』と⁸⁾『共武政表(明治12年)』とを資料にして藩領人口を算出した。

ところで、本研究で領内人口を本領と飛地領に分けて考察する必要があると考えたのは、次のような理由からである。周知のように、近世城下町は単に行政・軍事の中心地であつただけでなく、領国経済の中心地でもあつたが、領国経済の中心という観点からみれば、本領から遠く隔つた飛地と城下町との関係は稀薄であつたと考えてよい。もっとも、飛地領といえども、

その租税が本領の租税と相まって武家人口を支える働きをしていたから、その意味では飛地領人口も、城下町人口に関わりを持っていたといえるが、城下町の持っていた領国経済の中心地という点からいえば、城下町との関係が薄かつたといわねばならない。このような理由から、飛地を除いた本領のみの人口と城下町人口との関係を問題にしたいと考えたのである。

もっとも、藩人口を本領と飛地領に分けた資料はない。そこで、ここでは『旧高旧領取調帳』と『共武政表』を資料にしてそれを算出することにした。『旧高旧領取調帳』は、旧内務省地理局地誌課に保存されていたものを芦田伊人が筆写し、これに木村礎が校訂を加えたもので、それには明治2年(1879)当時の村別石高および旧藩領名が記載されている。また『共武政表』には、明治12年(1879)当時の旧城下町(陣屋所在町)の人口が記されており、さらにこの表をみれば、各郡別人口がわかる。

そこで『旧高旧領取調帳』によって、各郡ごとに郡内各村の石高を旧藩領別に集計し、集計された石高に応じて『共武政表』の郡人口を藩別に配分することにした。たとえば、大和国添上郡では、津藩に属する村の石高の合計が8,157石、柳生藩2,700石、久居藩1,197石、郡山藩6,676石、小泉藩28石となる。また、添上郡には藩領とは別に、幕府領、寺社領の石高39,683石がある。そこで、幕府領、寺社領、藩領の石高に応じて、明治12年の添上郡の人口56,700を配分すると、津藩7,946、柳生藩2,611、久居藩1,192、郡山藩6,471、小泉藩28となる。そして、このように配分された郡内藩別人口を、さらに各藩ごとに集計して、藩領人口が計算されたのである。なお、藩別石高を集計する際、「藩預所」は藩領とみなして処理された。このような方法で計算された領内人口は、表1に示されている。

3) 城下町(陣屋所在町)人口

城下町人口は、前述したように『共武政表』によつた。ただし、なかには、たとえば鹿児島⁹⁾の人口が20,171と記されているように、城下町

時代の人口に比べて少ないと思われるものがあり、反対に多すぎると思われるものもある。これらについては『統計集誌、306号』による明治19年の人口を用いた。表1の城下町人口のうち、*印のついているものがそれである。なお、長岡、膳所、高取については、明治31年の人口¹⁰⁾を用いている。

II 分析と考察

1) 目的と方法

表1に、222藩の石高、領内人口が示されている。藩の配列順序は、石高(A欄)の多い順になっている。B欄の領内人口(甲)は、前記『府藩県別・身分別人員表』による人口、C欄の領内人口(乙)は『旧高旧領取調帳』『共武政表』を資料にして算出されたものである。また、領内人口(乙)には、飛地を除いた本領人口が()内に示されるとともに、その下に全藩領内人口も記されている。領内人口(甲)と領内人口(乙)とを比較すると、一般に(乙)の方の人口が多くなっているが、これは(甲)の時期から(乙)の時期にかけて約10年を経過したことが一因であると解釈することができよう。そのほか、(甲)と(乙)とで人口計算の方法が違うことも、原因となつていよう。なお、B欄、C欄の藩別人口のうち、()でくくられているものがあるが、これは数値の疑わしい人口である。たとえば、B欄の徳島藩人口123,046は、おそらく誤植による数値だと思われる。また、B欄のうち、人口記載のない藩があるが、これは『府藩県別・身分別人員表』に欠落している藩である。H欄の華・士・卒族比率は、『府藩県別・身分別人員表』から筆者が算出した%である。

E、F、G欄は、城下町人口(D欄)と藩石高・領内人口との割合を示したものである。E欄は城下町人口と藩石高との割合(D/A)、F欄は城下町人口と領内人口(甲)との割合(D/B)、G欄は城下町人口と領内人口(乙)との割合(D/C)を示している。

城下町人口と藩石高、領内人口との比率を別

別に計算したのは、城下町が政治・行政・軍事機能に圧倒的なウェイトをおく都市だったのか、それとも経済機能をもある程度重視しなければならない都市だったのか、それを知る一つの手がかりをつかみたかったからである。

政治・行政・軍事機能にほとんど依存する都市であったとしたら、城下町に居住した商工業者は、武家人口を支えることを主たる役割とするにすぎなかったであろうから、武家人口が藩石高に比例する以上、武家人口を支える町屋人口も間接的に藩石高に比例することになり、城下町人口と藩石高との間には、密接な比例関係が存在するはずである。しかし、城下町が経済機能をもある程度重視しなければならぬ都市だったとすれば、領内人口の増加に影響されて城下町人口も増加しなければならず、この場合は、城下町人口と領内人口との関係が密接になる。

もっとも、この点については、現在の感覚から領内人口との関係を考へてはならない。当時は、あくまでも封建時代であった。したがって、たとえば領内人口の増加が、無条件に城下町人口の増加を促したわけではなく、城下町への流入人口には、制限が加えられていたのである。あるいは、関山直太郎のいうように「城下町に発展性がないことは、その過半数或いは大きな部分を占めた武士及びその従属者が固定的であり、従ってそれを支える工商の人数にも固定的な限度があったからである。否中期以後には新規に武家数が殖やされる事由がなかったのみならず、反対に幕府や諸藩の財政窮乏は、或場合は家臣の縮少をさえ行わせ、さなくとも知行の縮減や借上げが広く行われた結果は、家臣の養う「又家来」や奉公人の数を減少せしめたにちがいない¹¹⁾」というようなことも知っておく必要がある。

なお、このことに関連して、関山は、金沢、岡山、高岡、熊本、高田、仙台の人口が、江戸期を通じてほとんど増加しなかったことをあげている。また関山は「普通徳川時代の後半期には、商業が大いに発展し、手工業生産にもマニュファクチュア制が発展して、従って都市も著

表1 城下町人口と藩石高、領内人口

・文化10年の石高 * 明治19年の人口 **明治31年の人口

() 飛地を除いた本領内人口およびその比率

(()) 数値に疑問のある領内人口およびその比率

	県	城下町 (陣屋)	A	B	C	D	E	F	G	H
			石高 (明治初 期, 万石)	領内人口 (甲)	領内人口 (乙)	城下町人口 (明治12年)	城下町人口 石高 (D/A)	城下町人口 領内人口(甲) (D/B)	城下町人口 領内人口(乙) (D/C)	華・土・ 卒族比率 (%)
1	石川	金沢	102.2	1,086,164	997,529	107,979*	0.106	0.099	0.108	5.1
2	鹿児島	鹿児島	77.0	896,817	869,113	45,097	0.059	0.050	0.052	37.9
3	宮城	仙台	62.5	239,906	815,332	61,709	0.099	0.257	0.076	17.7
4	愛知	名古屋	61.9	918,143	866,543	114,898	0.186	0.125	0.133	4.0
5	和歌山	和歌山	55.5	540,969	693,588	60,492*	0.109	0.112	0.087	7.1
6	熊本	熊本	54.0	730,531	834,065	44,384*	0.082	0.061	0.053	15.0
7	福岡	福岡	52.0	367,478	427,045	45,712	0.088	0.124	0.107	8.9
8	広島	広島	42.6	914,174	980,179	76,484*	0.180	0.084	0.078	3.6
9	山口	萩	36.9	565,368	615,695	21,206*	0.057	0.038	0.034	3.9
10	佐賀	佐賀	35.7	—	344,951	24,657*	0.069	—	0.071	—
11	茨城	水戸	35.0	281,239	262,123	19,010	0.054	0.068	0.073	8.1
12	鳥取	鳥取	32.5	371,669	373,129	36,503	0.112	0.098	0.098	8.8
13	三重	津	32.3	244,252	179,227	10,590*	0.049	0.065	0.089	3.5
14	福井	福井	32.0	284,545	264,469	37,376*	0.117	0.131	0.141	4.3
15	岡山	岡山	31.5	350,909	364,443	32,383	0.103	0.092	0.089	4.6
16	徳島	徳島	25.7	((123,046))	((345,933)) 523,286	36,507*	0.304	((0.297))	((0.106)) 0.070	26.0
17	滋賀	彦根	25.0	189,954	((171,199)) 194,308	18,577*	0.074	0.098	((0.109)) 0.096	3.8
18	高知	高知	24.2	516,545	577,695	31,299	0.129	0.061	0.054	9.6
19	福島	若松	23.0	199,249	((321,135)) 366,833	22,502*	0.098	0.113	((0.070)) 0.061	—
20	福岡	久留米	21.0	241,495	279,450	20,907*	0.100	0.087	0.075	6.9
21	秋田	秋田	20.5	412,652	496,277	31,174	0.152	0.076	0.063	6.8
22	岩手	盛岡	20.0	137,826	381,839	28,978*	0.145	0.210	0.076	9.3
23	島根	松江	18.6	295,829	319,262	33,381*	0.179	0.113	0.105	5.2
24	群馬	前橋	17.0	178,324	((79,403)) 200,058	16,868*	0.095	0.099	((0.212)) 0.084	5.7
25	奈良	郡山	15.1	102,430	((84,409)) 119,135	14,344*	0.095	0.140	((0.170)) 0.120	6.1
26	愛媛	松山	15.0	211,882	235,273	27,456	0.183	0.130	0.117	6.8
27	兵庫	姫路	15.0	223,762	239,249	23,554*	0.157	0.105	0.098	5.2
28	福岡	小倉	15.0	117,843	131,315	11,594*	0.077	0.098	0.088	13.8
29	新潟	高田	15.0	168,844	((225,347)) 251,439	22,190*	0.148	0.131	((0.098)) 0.088	5.1
30	山形	米沢	14.7	128,786	169,028	26,960*	0.183	0.209	0.160	29.7
31	山形	鶴岡	14.0	95,350	((180,571)) 202,537	19,606*	0.163	0.206	((0.109)) 0.097	15.7
32	香川	高松	12.0	305,197	377,483	37,698*	0.314	0.123	0.100	9.2
33	福岡	柳河	11.9	127,326	123,911	14,025	0.118	0.110	0.113	11.6
34	福島	白河	11.0	106,309	((40,975))	10,758*	0.098	0.101	((0.263))	—
35	千葉	佐倉	11.0	119,150	((65,962)) 113,051	3,423*	0.031	0.029	((0.052)) 0.030	6.3

	県	城下町 (陣屋)	A	B	C	D	E	F	G	H
			石高 (明治初期,万石)	領内人口 (甲)	領内人口 (乙)	城下町人口 (明治12年)	城下町人口 石高 (D/A)	城下町人口 領内人口(甲) (D/B)	城下町人口 領内人口(乙) (D/C)	華・士・ 卒族比率 (%)
36	広島	福山	11.0	185,863	203,641	17,239	0.157	0.093	0.085	5.0
37	福井	小浜	10.3	113,612	113,703	10,020	0.097	0.088	0.088	6.2
38	京都	淀	10.2	72,786	(21,031) 87,663	3,670	0.036	0.050	(0.175) 0.042	5.8
39	青森	弘前	10.0	255,133	303,081	32,566	0.326	0.128	0.107	9.2
40	埼玉	忍	10.0	114,009	(66,585) 85,955	10,668	0.107	0.094	(0.160) 0.124	4.8
41	新潟	新発田	10.0	192,604	170,344	10,807	0.108	0.056	0.063	5.4
42	富山	富山	10.0	116,755	93,916	42,895	0.429	0.367	0.457	14.4
43	岐阜	大垣	10.0	78,711	165,528	16,339	0.163	0.208	0.099	8.0
44	長野	松代	10.0	148,642	169,306	9,363	0.094	0.063	0.055	6.9
45	岡山	津山	10.0	106,464	123,947	14,457	0.145	0.136	0.117	4.3
46	愛媛	宇和島	10.0	169,526	194,645	12,181	0.122	0.072	0.063	3.9
47	大分	中津	10.0	99,148	(87,497) 118,234	11,031	0.110	0.111	(0.126) 0.093	6.8
48	茨城	土浦	9.5	74,801	(48,979) 79,146	8,270	0.087	0.111	(0.169) 0.104	1.3
49	群馬	高崎	8.2	97,802	(54,958) 95,792	16,173	0.197	0.165	(0.294) 0.169	4.2
50	埼玉	川越	8.2	62,767	(65,567) 80,726	6,206	0.076	0.099	(0.095) 0.077	6.2
51	茨城	古河	8.0	83,579	(49,781) 109,419	9,275	0.116	0.111	(0.186) 0.085	4.8
52	茨城	笠間	8.0	47,840	(42,280) 62,265	5,054	0.063	0.106	(0.120) 0.081	7.9
53	兵庫	明石	8.0	76,174	(77,030) 88,260	18,282	0.229	0.240	(0.237) 0.207	6.6
54	神奈川	小田原	7.5	92,837	113,842	13,367	0.178	0.144	0.117	5.8
55	新潟	長岡	7.4	—	177,397	28,350	0.383	—	0.160	—
56	佐賀	小城	7.3	33,438	38,739	3,235	0.044	0.097	0.084	22.5
57	栃木	宇都宮	7.0	60,193	70,841	18,536	0.265	0.308	0.262	6.8
58	石川	大聖寺	7.0	48,766	63,762	9,991	0.143	0.205	0.157	8.6
59	愛知	豊橋	7.0	77,031	(80,723) 95,933	8,469	0.121	0.110	(0.105) 0.088	4.2
60	京都	宮津	7.0	71,136	75,286	9,600	0.137	0.135	0.128	3.4
61	長崎	島原	7.0	175,055	(132,246) 168,645	10,177	0.145	0.058	(0.077) 0.060	3.7
62	宮崎	延岡	7.0	125,750	(99,795) 143,134	3,509	0.050	0.028	(0.035) 0.025	6.0
63	長崎	平戸	6.1	145,826	151,626	3,278	0.054	0.022	0.022	11.6
64	福島	中村	6.0	63,893	72,788	2,052	0.034	0.032	0.028	26.4
65	福島	棚倉	6.0	30,609	(45,340) 51,639	2,523	0.042	0.082	(0.056) 0.049	12.6
66	群馬	館林	6.0	76,750	(25,467) 80,141	9,845	0.164	0.128	(0.387) 0.123	5.9
67	長野	松本	6.0	123,159	238,640	14,502	0.242	0.118	0.061	8.6
68	静岡	浜松	6.0	—	(76,296) 83,603	12,724	0.212	—	(0.167) 0.152	—
69	愛知	西尾	6.0	54,347	(40,639) 63,013	5,580	0.093	0.103	(0.137) 0.089	4.2

	県	城下町 (陣屋)	A	B	C	D	E	F	G	H
			石高 (明治初期, 万石)	領内人口 (甲)	領内人口 (乙)	城下町人口 (明治12年)	城下町人口 石高 (D/A)	城内人口 (D/B)	城下町人口 (D/C)	華・士・ 卒族比率 (%)
70	三重	桑名	6.0	65,783	(58,903) 214,230	14,926	0.249	0.227	(0.253) 0.070	9.9
71	三重	亀山	6.0	45,597	(39,483) 63,118	2,839	0.047	0.062	(0.072) 0.045	8.1
72	滋賀	膳所	6.0	45,708	44,080	7,272	0.121	0.159	0.165	8.0
73	兵庫	篠山	6.0	58,735	(61,078) 71,246	5,435	0.091	0.093	(0.089) 0.076	6.2
74	山口	岩国	6.0	90,393	92,651	3,406	0.057	0.038	0.037	9.1
75	愛媛	大洲	6.0	97,758	98,550	3,261	0.054	0.033	0.033	5.1
76	佐賀	鹿島	6.0	13,331	23,864	1,274	0.021	0.093	0.053	25.2
77	長野	上田	5.3	62,239	74,018	12,548	0.237	0.202	0.170	5.8
78	三重	久居	5.3	37,883	(29,063) 34,664	3,804	0.072	0.100	(0.131) 0.110	7.6
79	大阪	岸和田	5.3	67,622	77,827	13,314	0.251	0.197	0.172	3.7
80	佐賀	蓮池	5.2	31,462	30,266	1,830	0.035	0.058	0.060	17.1
81	兵庫	竜野	5.1	51,051	(71,632) 98,316	6,065	0.119	0.119	(0.085) 0.062	6.6
82	香川	丸亀	5.1	134,285	143,334	14,276	0.280	0.106	0.100	5.4
83	宮崎	飫肥	5.1	48,837	41,338	1,000	0.020	0.020	0.024	25.8
84	山形	山形	5.0	32,262	(33,688) 37,163	21,828	0.437	0.677	(0.648) 0.589	9.9
85	福島	三春	5.0	36,763	35,895	5,600	0.112	0.152	0.156	7.4
86	福島	磐城平	5.0	15,377	(20,174) 43,003	5,424	0.108	0.352	(0.269) 0.126	14.3
87	福島	二本松	5.0	37,348	94,897	7,314	0.146	0.196	0.077	11.5
88	新潟	村上	5.0	80,004	80,760	7,426	0.149	0.093	0.092	4.5
89	福島	丸岡	5.0	21,703	27,584	4,675	0.094	0.215	0.169	5.2
90	愛知	岡崎	5.0	52,819	66,949	13,171	0.263	0.249	0.197	6.0
91	静岡	掛川	5.0	—	97,478	5,737	0.115	—	0.059	—
92	京都	亀岡	5.0	51,814	(29,633) 46,868	6,339	0.127	0.122	(0.213) 0.135	7.7
93	岡山	高梁	5.0	26,332	50,326	3,888	0.078	0.148	0.077	9.0
94	鳥根	浜田	5.0	228,863	95,602	6,586	0.132	0.029	0.069	—
95	福岡	秋月	5.0	33,587	35,524	3,610	0.072	0.107	0.102	13.2
96	大分	白杵	5.0	78,986	96,887	10,116	0.202	0.128	0.104	7.1
97	岐阜	阜郡上	4.8	54,850	60,638	5,597	0.117	0.097	0.092	4.1
98	千葉	関宿	4.8	48,756	(31,715) 53,559	1,018	0.021	0.021	(0.032) 0.019	8.3
99	鳥根	津和野	4.3	69,268	(52,535) 95,593	4,047	0.095	0.059	(0.078) 0.043	6.2
100	静岡	田中	4.0	—	50,817	1,283	0.032	—	0.025	—
101	福岡	鯖江	4.0	30,275	62,836	3,618	0.090	0.120	0.058	8.8
102	福岡	大野	4.0	31,115	33,543	9,290	0.232	0.299	0.277	5.9
103	兵庫	尼崎	4.0	49,615	(48,041) 61,980	12,530	0.313	0.253	(0.261) 0.202	6.3
104	山口	徳山	4.0	55,853	36,366	4,385	0.110	0.079	0.121	7.4
105	和歌山	田辺	3.8	63,105	70,559	10,855	0.286	0.172	0.154	4.6
106	大阪	高槻	3.6	54,928	(37,654) 42,078	2,231	0.062	0.041	(0.059) 0.053	4.4

	県	城下町 (陣屋)	A	B	C	D	E	F	G	H
			石高 (明治初期, 万石)	領内人口 (甲)	領内人口 (乙)	城下町人口 (明治12年)	城下町人口 石高 (D/A)	城下町人口 領内人口(甲) (D/B)	城下町人口 領内人口(乙) (D/C)	華・士・ 卒族比率 (%)
107	兵庫	三田	3.6	21,898	(22,632) 28,531	1,395	0.039	0.064	(0.062) 0.049	6.3
108	群馬	沼田	3.5	41,047	(23,255) 69,806	3,497	0.100	0.085	(0.150) 0.051	1.0
109	静岡	横須賀	3.5	—	31,889	3,253	0.093	—	0.102	—
110	和歌山	新宮	3.5	61,677	73,927	9,366	0.268	0.152	0.127	5.1
111	京都	舞鶴	3.5	48,893	51,657	7,312	0.209	0.150	0.142	4.9
112	愛媛	今治	3.5	75,102	97,293	8,954	0.256	0.119	0.092	5.1
113	長野	高遠	3.3	47,888	66,356	4,345	0.132	0.091	0.065	5.2
114	岐阜	加納	3.2	29,475	38,353	4,962	0.155	0.168	0.129	5.8
115	京都	福知山	3.2	31,136	31,815	4,969	0.155	0.160	0.160	4.7
116	大分	杵築	3.2	52,247	57,277	3,262	0.102	0.062	0.057	6.4
117	栃木	烏山	3.0	27,687	(17,446) 30,532	2,580	0.086	0.093	(0.148) 0.085	1.1
118	栃木	壬生	3.0	25,956	(24,259) 38,196	4,383	0.146	0.169	(0.181) 0.115	6.5
119	群馬	安中	3.0	27,428	(17,840) 32,474	3,902	0.130	0.142	(0.219) 0.120	4.6
120	千葉	久留里	3.0	22,901	(20,011) 33,835	1,358	0.045	0.059	(0.068) 0.040	5.9
121	新潟	村松	3.0	37,197	22,703	7,554	0.252	0.203	0.333	10.5
122	岐阜	高須	3.0	—	(11,878) 40,456	3,412	0.114	—	(0.287) 0.084	—
123	岐阜	岩村	3.0	37,146	(36,174) 47,364	3,013	0.100	0.081	(0.083) 0.064	4.1
124	岐阜	今尾	3.0	—	36,437	2,906	0.097	—	0.080	—
125	三重	鳥羽	3.0	52,797	62,781	4,723	0.157	0.089	0.075	3.1
126	兵庫	出石	3.0	35,213	37,429	5,797	0.193	0.165	0.155	5.2
127	島根	広瀬	3.0	26,364	35,263	3,786	0.126	0.144	0.107	5.7
128	愛媛	西条	3.0	61,036	83,283	1,649	0.055	0.027	0.020	5.7
129	愛媛	吉田	3.0	54,160	55,542	4,558	0.152	0.084	0.082	3.9
130	山形	上山	2.7	31,519	(13,146) 30,828	4,209	0.156	0.134	(0.320) 0.137	4.6
131	岩手	一関	2.7	26,198	10,580	4,293	0.159	0.164	0.405	10.7
132	千葉	大多喜	2.7	22,687	(14,204) 23,851	1,660	0.061	0.073	(0.117) 0.070	3.4
133	長崎	大村	2.7	120,553	160,069	2,230	0.083	0.018	0.014	11.1
134	宮崎	高鍋	2.7	43,349	53,179	902	0.033	0.021	0.017	22.0
135	京都	園部	2.6	35,828	34,737	2,600	0.100	0.073	0.075	5.2
136	滋賀	水口	2.5	21,768	20,691	4,990	0.200	0.229	0.241	7.1
137	奈良	高取	2.5	22,390	23,332	3,544	0.142	0.158	0.152	8.7
138	岡山	山方	2.5	27,796	34,604	1,281	0.051	0.046	0.037	2.8
139	岡山	足守	2.5	17,510	(15,723) 22,831	2,251	0.091	0.129	(0.143) 0.099	5.6
140	大分	日出	2.5	20,936	29,770	2,453	0.098	0.117	0.082	9.6
141	埼玉	日岩	2.3	41,238	(15,818) 33,977	5,946	0.259	0.144	(0.376) 0.175	3.7
142	岡山	勝山	2.3	25,976	(29,916) 37,440	2,230	0.097	0.086	(0.075) 0.060	4.9

	県	城下町 (陣屋)	A	B	C	D	E	F	G	H
			石高 (明治初期, 万石)	領内人口 (甲)	領内人口 (乙)	城下町人口 (明治12年)	城下町人口 石高 (D/A)	城下町人口 領内人口(甲) (D/B)	城下町人口 領内人口(乙) (D/C)	華・士・ 卒族比率 (%)
143	愛知	刈谷	2.3	27,843	(17,516) 25,071	2,516	0.109	0.090	(0.144) 0.100	4.5
144	山形	松峯	2.2	23,159	20,156	3,000	0.137	0.130	0.147	9.4
145	福井	勝山	2.2	18,657	19,133	6,677	0.304	0.358	0.349	6.9
146	熊本	人吉	2.2	54,152	70,465	3,010	0.137	0.056	0.043	35.0
147	大分	大分	2.1	33,326	38,007	6,844	0.326	0.205	0.180	7.0
148	青森	八戸	2.0	68,197	75,591	10,198	0.510	0.150	0.135	5.8
149	秋田	本荘	2.0	26,257	32,721	6,394	0.320	0.244	0.195	10.2
150	群馬	伊勢崎	2.0	21,663	26,151	3,811	0.191	0.176	0.146	4.4
151	群馬	小幡	2.0	14,209	24,698	1,321	0.067	0.093	0.053	4.5
152	茨城	下館	2.0	12,771	7,052	1,665	0.083	0.130	0.235	10.2
153	茨城	石岡	2.0	18,113	9,714	7,526	0.377	0.416	0.775	6.1
154	長野	飯山	2.0	32,639	44,652	2,957	0.148	0.091	0.066	4.0
155	愛知	挙母	2.0	19,674	(12,711) 22,374	3,617	0.181	0.184	(0.285) 0.162	4.8
156	三重	長島	2.0	15,771	(16,420) 24,734	630	0.032	0.040	(0.038) 0.025	7.7
157	京都	綾部	2.0	18,426	18,385	2,318	0.116	0.126	0.126	6.2
158	兵庫	柏原	2.0	18,551	18,074	1,562	0.078	0.084	0.086	4.5
159	兵庫	赤穂	2.0	35,558	26,993	3,572	0.179	0.100	0.132	4.7
160	岡山	山庭	2.0	21,886	29,806	1,436	0.072	0.066	0.048	4.3
161	佐賀	唐津	2.0	63,229	91,639	8,348	0.417	0.132	0.091	8.3
162	大分	佐伯	2.0	67,687	73,298	5,885	0.294	0.087	0.080	3.2
163	秋田	田亀	1.8	23,804	22,077	3,644	0.202	0.153	0.165	11.4
164	山形	天童	1.8	12,389	15,885	2,659	0.148	0.215	0.167	2.1
165	福島	島泉	1.8	10,351	(9,011) 14,948	604	0.034	0.058	(0.067) 0.040	7.9
166	栃木	黒羽	1.8	19,532	19,583	1,900	0.105	0.097	0.097	9.3
167	滋賀	西大路	1.8	8,841	9,668	1,690	0.094	0.191	0.175	8.7
168	岡山	新見	1.8	17,179	18,341	1,290	0.072	0.075	0.070	6.5
169	茨城	結城	1.7	18,447	47,619	6,931	0.375	0.375	0.146	5.2
170	長野	飯田	1.7	28,393	43,243	9,873	0.581	0.348	0.228	5.6
171	栃木	佐野	1.6	13,012	(9,999) 18,464	7,415	0.463	0.570	(0.742) 0.402	8.5
172	千葉	佐貫	1.6	17,639	17,413	1,138	0.071	0.065	0.065	3.2
173	秋田	矢島	1.5	15,288	17,109	1,856	0.124	0.122	0.108	5.1
174	長野	小諸	1.5	31,290	34,297	7,007	0.467	0.220	0.204	5.1
175	三重	神戸	1.5	10,603	((4,825))	2,721	0.181	0.257	((0.564))	6.6
176	兵庫	豊岡	1.5	19,036	23,350	5,287	0.352	0.278	0.226	4.2
177	兵庫	三日月	1.5	19,640	16,799	646	0.043	0.033	0.038	7.0
178	長野	岩村田	1.5	10,200	15,415	2,908	0.194	0.285	0.189	5.0
179	岡山	生坂	1.5	10,126	10,900	794	0.053	0.078	0.073	5.0
180	福島	島湯	1.4	8,235	8,895	324	0.023	0.039	0.036	5.4
181	千葉	葉宮	1.3	14,544	9,240	1,669	0.128	0.115	0.181	3.8
182	滋賀	山上	1.3	10,246	7,875	1,373	0.106	0.134	0.174	3.5
183	大	阪伯	1.3	11,211	16,158	772	0.059	0.069	0.048	5.5

	県	城下町 (陣屋)	A	B	C	D	E	F	G	H
			石高 (明治初期, 万石)	領内人口 (甲)	領内人口 (乙)	城下町人口 (明治12年)	城下町人口 石高 (D/A)	城下町人口 領内人口(甲) (D/B)	城下町人口 領内人口(乙) (D/C)	華・士・ 卒族比率 (%)
184	千葉	多古	1.2	7,896	6,438	1,902	0.159	0.241	0.295	6.1
185	千葉	加治山	1.2	16,829	(7,506) 15,344	315	0.026	0.019	(0.042) 0.021	2.7
186	愛知	田原	1.2	23,600	25,305	1,116	0.093	0.047	0.044	3.8
187	岡山	成羽	1.2	17,379	(12,316) 17,582	2,267	0.189	0.130	(0.184) 0.129	4.3
188	大分	森	1.2	14,249	15,365	770	0.064	0.054	0.050	10.2
189	栃木	大田原	1.1	12,535	(10,988) 27,725	3,457	0.314	0.275	(0.315) 0.125	6.1
190	奈良	小泉	1.1	9,230	8,812	2,117	0.192	0.229	0.240	10.5
191	京都	峰山	1.1	10,776	8,610	2,476	0.225	0.230	0.288	6.0
192	兵庫	庫村岡	1.1	15,690	16,068	1,842	0.167	0.117	0.115	3.6
193	青森	森黒石	1.0	15,949	10,343	6,179	0.618	0.387	0.597	11.6
194	青森	森七戸	1.0	15,530	42,240	2,625	0.263	0.169	0.062	13.1
195	茨城	城志	1.0	5,785	6,716	1,647	0.165	0.285	0.245	12.0
196	茨城	城下妻	1.0	8,815	(5,390) 8,092	1,406	0.141	0.160	(0.261) 0.173	5.2
197	茨城	城麻生	1.0	9,092	11,343	620	0.062	0.068	0.055	4.5
198	茨城	城牛久	1.0	9,070	11,706	877	0.088	0.097	0.075	4.5
199	群馬	馬七日市	1.0	7,024	14,386	1,301	0.130	0.185	0.090	7.1
200	千葉	葉館山	1.0	23,680	18,054	2,762	0.276	0.117	0.153	1.8
201	千葉	葉小見川	1.0	8,221	4,581	2,007	0.200	0.244	0.438	3.8
202	新潟	潟黒川	1.0	9,179	13,144	1,083	0.108	0.118	0.089	4.2
203	新潟	潟三日市	1.0	9,061	13,144	1,422	0.142	0.157	0.108	4.1
204	新潟	潟椎谷	1.0	10,812	(6,597) 10,262	1,152	0.115	0.107	(0.174) 0.112	3.7
205	長野	野須坂	1.0	11,324	13,626	2,591	0.259	0.229	0.190	7.4
206	岐阜	阜高富	1.0	6,712	5,740	1,459	0.145	0.218	0.254	5.4
207	愛知	知西端	1.0	12,812	13,445	2,029	0.203	0.158	0.151	2.9
208	奈良	良田原本	1.0	4,521	3,710	2,722	0.272	0.602	0.733	9.5
209	奈良	良柳本	1.0	6,728	9,243	2,465	0.247	0.366	0.267	8.9
210	奈良	良芝村	1.0	7,401	8,026	1,281	0.128	0.173	0.160	8.4
211	京都	都山家	1.0	11,670	14,471	1,111	0.111	0.095	0.077	4.1
212	兵庫	庫安志	1.0	9,387	11,837	1,242	0.124	0.132	0.105	1.1
213	兵庫	庫山崎	1.0	10,410	12,451	2,046	0.205	0.197	0.164	8.6
214	兵庫	庫福本	1.0	—	6,529	848	0.085	—	0.130	—
215	岡山	山福岡	1.0	17,480	(16,212) 19,277	449	0.045	0.026	(0.028) 0.023	6.4
216	島根	根母里	1.0	8,225	8,572	1,032	0.103	0.125	0.120	6.6
217	山口	口清末	1.0	11,052	18,147	533	0.011	0.049	0.029	13.8
218	香川	川多度津	1.0	—	24,297	3,926	0.393	—	0.162	—
219	愛媛	媛小松	1.0	15,155	19,474	1,250	0.125	0.082	0.064	4.9
220	愛媛	媛新谷	1.0	14,357	9,814	945	0.095	0.062	0.096	6.1
221	福岡	岡三池	1.0	9,092	9,089	1,740	0.174	0.191	0.191	8.9
222	福岡	岡千束	1.0	5,868	10,285	405	0.041	0.069	0.039	15.5

しく発展したと考えがちであり、私自身も旧著にそのことを書いたことがあった。しかしそれは実証を経ていなかったのみならず、断片的ながら知られる証拠は、むしろ都市人口の発展や、新しい都市の勃興を語るものではなく、これを否定するように見えるのである。強いていえば、幕府の終末期に至りやや上昇の兆を示すに過ぎない¹²⁾ともいっている。

しかし、こういう事実があったとしても、中には人口の増加した城下町があったことも事実である。たとえば、関山の紹介している例の中にも、名古屋のように享保6年(1726)の50,375から、慶応元年(1865)の73,963へと、大きく増加しているものがある¹³⁾。あるいは、農村から城下町その他の都市へ人口が流入し、彼らの多くが定職を持たない日傭となったことは、矢崎武夫が「享和元年(1801)岡崎城下全屋敷数1,669軒中、304軒1割7分が日傭、弘化二年(1844)山口では全屋敷数1,441軒中、畠作日傭641軒3割9分におよんでいる¹⁴⁾」と記していることによっても知られよう。

また、幕末期に至ると、地域によっては、肥料使用などによって農業生産が発展したり、手工業生産が発展したりして、農村人口が増加したところがあり、そういうところでは、農村地域の人口増加を背景にして城下町の人口も増加した。

たとえば、表1の名古屋藩や広島藩の領内人口をみると、両藩とも石高の割に人口の多いことに気づく。名古屋藩の場合、石高は61.9万石で、鹿児島藩(77万石)よりも低く、和歌山藩(55.5万石)よりわずかに高い程度であるにもかかわらず、その人口は鹿児島藩、和歌山藩のいずれよりも多い。広島藩の場合も同様で、42.6万石の石高に比べて、その人口は、広島藩よりも石高の高い和歌山、熊本、福岡各藩のいずれよりも多い。石高は、原則的には江戸時代初期の米の生産高とみなしてよく、したがって当時の人口は、ほぼ石高に比例していたと考えられるが、それが明治初期に至ってこのように違ってきたのは、藩の経済発展に相違があった

と考えねばならないだろう。萩藩も石高の割に人口が多いが、ここでは江戸時代を通じて、瀬戸内沿岸の入江に大規模な干拓新田が造成され、幕末期における米の生産高は100万石を越えたといわれている。このような経済発展による領内人口の増加が、城下町人口の増加をもたらした。たとえば、表1によって名古屋や広島の人

2) 結果の集約

矢守一彦の作製した表によれば、領内人口に対する城下町人口の比率は、大ざっぱにいて10%前後である¹⁵⁾。もっとも、田原本、柳本など1万石クラスの零細藩の場合は、その比率が著しく高くなっている。このことに関連して、矢守は「人口5~600からせいぜい2,000前後の陣屋所在地を「城下町」のカテゴリーに含ませることは甚だ疑問である。その意味からは主として5~10万石以上の標本による傾向線には大きな危険を含まないと思われる¹⁶⁾」として、人口比率を問題にする場合、大藩と小藩とを区別して考察する必要のあることを指摘している。しかし、ここではまず、大藩、小藩を合わせたすべての藩の観察から始めていくことにしよう。

表1をみてわかるように、E欄(城下町人口/石高)、F欄(城下町人口/領内人口甲)、G欄(城下町人口/領内人口乙)のいずれの場合も、その数値には、相当な散らばりがある。その平均値と標準偏差は、Eの場合 \bar{x} (平均値)=0.151、 S_x (標準偏差)=0.104、Fの場合 \bar{x} =0.139、 S_x =0.098である。

Gについては、2種類の計算をしてみた。一つは、飛地を除外した本領人口による場合の計算、他は飛地をも含めた領内総人口による計算である。その数値は、前者で \bar{x} =0.144、 S_x =0.121、後者で \bar{x} =0.124、 S_x =0.107となり、いずれの場合も相当な散らばりがみられる。そこで、これをさらに見やすくするため、2種類のグラフを作ってみた。一つは、縦軸に石高または領内人口をとり、横軸にE、F、G欄の比

率をとったものである(図1, 2, 3, 4)。
 他は、アレクサンダーソンが合衆国都市の機能分析を行なった際用いた方法¹⁷⁾を適用したもので、これは横軸に、E, F, G欄の数値に基づいて、222の城下町を比率の低いものから高いものへと左から右へ順に並べ、それぞれの比率をドットしたものである(図5, 6, 7)。

図1, 2, 3, 4においては分布の散らばりが大きく、これに基づいて傾向をつかむことはなかなか困難である。とくに、図1(石高に対する城下町人口の比率)の場合、それがはなはだしい。しかし、図2, 3, 4については、明瞭とはいえないまでも、若干の傾向が見い出される。

一つは、図2, 3, 4のいずれの場合でも、領内人口の多い藩の城下町人口比率がほぼ一定して、散らばりが少ないことである。図2(領内人口甲に対する城下町人口比率)の場合は領内人口20万以上、図3, 4(領内人口乙に対する城下町人口比率)の場合は領内人口10万以上の藩について、このことが認められる。また、これらの大藩は、小藩に比べて一般に比率が低くなっている。このため、図2, 3, 4のいずれの場合も、ドットの分布は左上り、右下りの傾向を示している。この傾向が最もよく現れているのは図3(飛地を含まない本領のみ的人口)である。

次に観察されることは、領内人口の多い藩(図2では20万以上、図3, 4では10万以上)の比率は、大部分が0.05(5%)から0.15(15%)の間に位置していることである。これに対して、領内人口の少ない藩(小藩)の場合は散らばりが大きく、とくに図3, 4によれば、領内人口1万に達しない藩の比率は、著しく高くなっている。

ところで、大藩の場合は比率が低く、小藩の場合は比率が高くなるのは、なぜであろうか。この設問に対して答えるためには、個々の城下町についての実証的な研究が必要になるが、推測的な答としていえることは、大藩と小藩とで、商業的な地域中心地としての地位に相違があっ

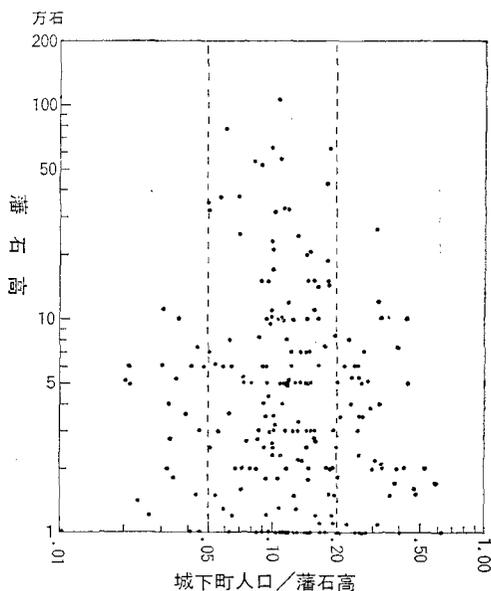


図1 藩石高に対する城下町人口率の分布

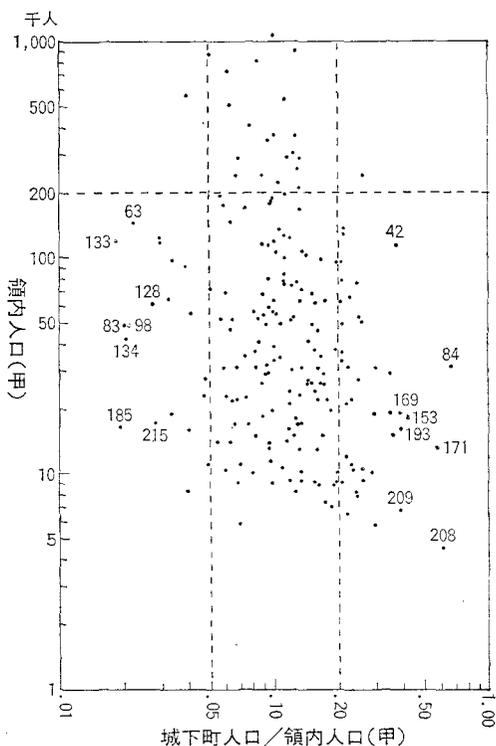


図2 領内人口(甲)に対する城下町人口率の分布

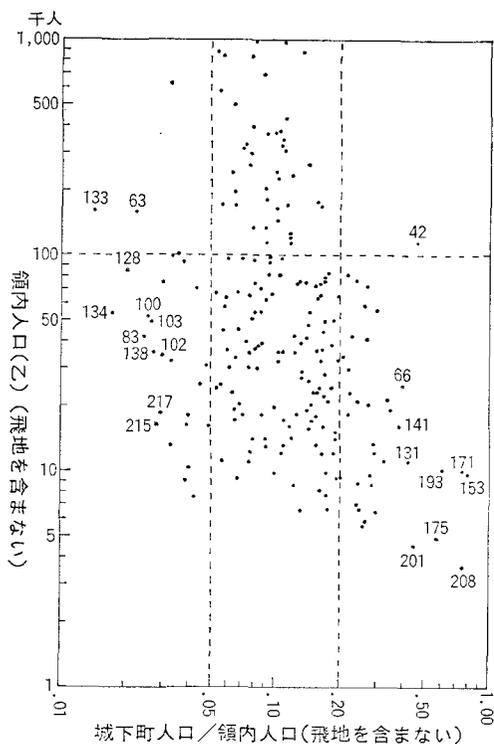


図3 領内人口（飛地を含まない）に対する城下町人口率（図中の番号は表1の城下町番号に対応）

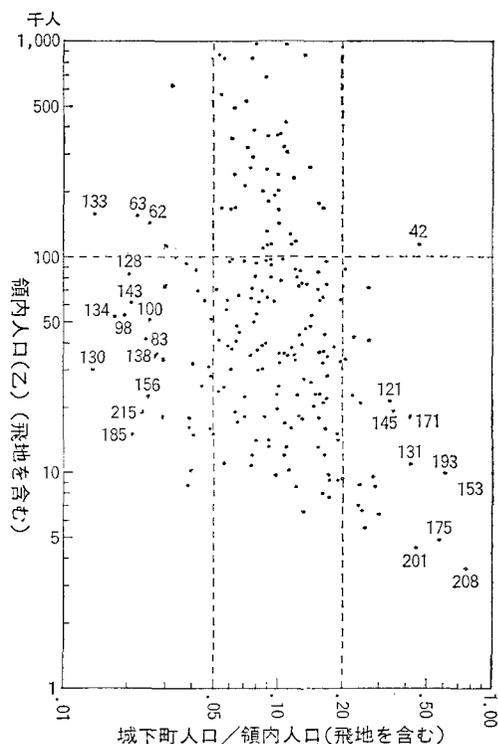


図4 領内人口（飛地を含む）に対する城下町人口率（図中の番号は表1の城下町番号に対応）

たのではないかということである。

すなわち、徒歩交通の時代にあつては、中心地の商圈は徒歩による1日往復可能な範囲、せいぜい片道5里(20km)の範囲に限定されたから、大藩の場合には、城下町の商圈が全藩領に及んだわけではない。これに対して零細藩の場合には城下町（陣屋所在町）の商圈は藩領を越えて広がったから、城下町を構成する諸機能のうち、経済的機能の占める割合が、大藩の場合よりは大きかったと考えられる。とくに規模の小さな城下町の場合、もしそれが宿場町あるいは港町を兼ねることになれば、経済的機能のシェアは一層大きくなる。もちろん、経済的機能の弱かった藩も多数あったことは、いうまでもない。このようなわけで、領内人口10万人以下の藩の場合には、藩領内の経済発展に差があっただけでなく、各城下町の経済的機能にも差があつて、それらが城下町人口比率の散らばりをもたらしたと考えられる。

このように図1, 2, 3, 4については、比率の散らばりの大きいことが観察されるが、さらによく観察すると、比率の多くは0.05~0.20（5~20%）の範囲内に含まれていることに気づく。そしてこのことは、図5, 6, 7を観察することによって、一層明瞭になる。すなわち、図5, 6, 7のいずれを見ても、グラフの傾斜

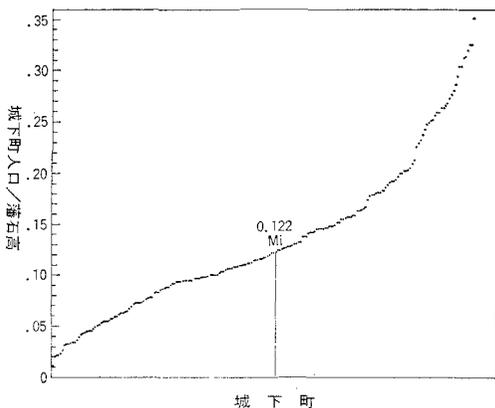


図5 藩石高に対する城下町人口率の分布曲線

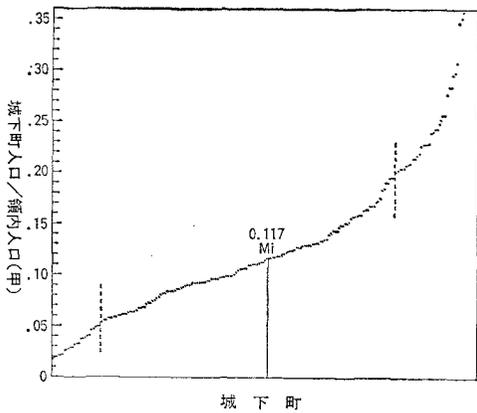


図6 領内人口(甲)に対する城下町人口率の分布曲線

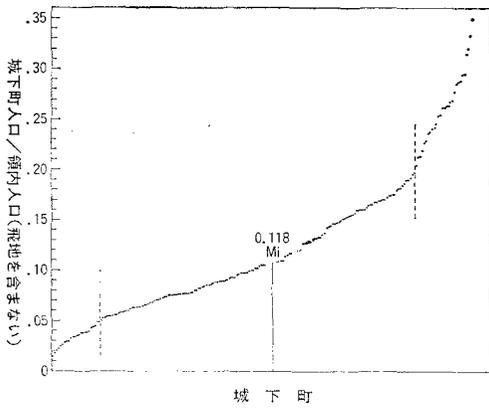


図7 領内人口(飛地を含まない)に対する城下町人口率の分布曲線

は比率0.05以下と0.20以上において急になるが、0.05~0.20間の傾斜はゆるやかで、ここが安定した比率であることを示している。また、各グラフについて中央値(Mi, 分布の中央に位置する城下町の比率を平均値としたもの)は、図5(城下町人口/石高)の場合は0.122, 図6(城下町人口/領内人口甲)の場合は0.117, 図7(城下町人口/領内人口乙, ただし飛地領を含まない)の場合は0.118となり、いずれもだいたい10%に近い数値となっている。これらをまとめていえば、城下町人口比率は0.12を中心にしなから、0.05~0.20帯内に大部分のものが含まれているということになる。

図8は、5万石以上の藩の本領人口(飛地を含まない人口)に対する城下町人口率の分布を

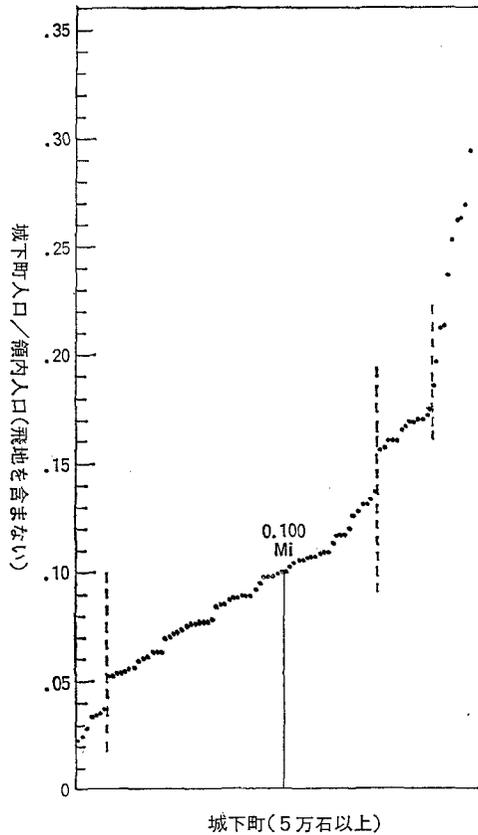


図8 領内人口(飛地を含まない)に対する城下町(5万石以上)人口率の分布曲線

示したグラフである。5万石の藩領はだいたい一つの郡の領域に該当し、またこの場合には、ほぼ藩領全域が城下町の商圏に入ることになる。このグラフでは、中央値(Mi)は0.10(10%)となり、また0.05~0.14の範囲が安定帯を構成することになる。したがって、安定帯の幅(散らばりの幅)は、零細藩をも加えた場合に比べてはるかに小さく、5万石以上の藩の場合にこそ、領内人口に対して占める城下町人口の割合は、約10パーセントであるといつてさしつかえないことになる。さらに、10万石以上の藩47の分布をみると、萩、米沢、郡山、淀、前橋、富山の6城下町を除き、41の城下町が0.05~0.14の安定帯に位置していることがわかる。

また、図8のグラフの中で、城下町人口比率が5%に達しないのは平戸、飢肥、中村(福島県)、大洲、萩、延岡、岩国の7つである。この

うち、萩は36.9万石の大藩の城下町でありながら、城下町人口比率が0.034ときわめて低い。その理由として、一門あるいは大身家臣の知行地に陪臣家臣団が分散居住していたこと、干拓新田の造成などによって領内人口が増加したこと、萩の位置が領内の西に偏していたことなどがあげられよう。また、萩を除く6城下町のうち、平戸、萩肥、延岡の3つが九州の縁辺部に位置していたことも注目される。

図8のうち、比率0.14を越える城下町は26あるが、そのうち21が5～9.9万石の藩の城下町であった。また、26の城下町のうち、忍、土浦、郡山、淀、古河、前橋、亀岡、桑名、磐城平、高崎、館林は、飛地の占める割合の高かった藩である。この場合は、当然城下町人口比率が高くなる。さらに、膳所、浜松、岡崎、明石、宇都宮、白河の各城下町は重要な街道に臨んでおり、この場合には宿場町的機能が付随して、城下町人口比率を高くしたのではないかということが考えられる。

む す び

以上の分析と考察をまとめると、およそ次のようになる。

- 1) 藩石高、領内人口のいずれの場合も、これらに対する城下町人口比率には、ある程度の規則性が認められる。また、規則性は、藩石高の場合よりも、領内人口の場合に明瞭になる。
- 2) 藩石高、領内人口に対する城下町人口比率は0.05～0.20の範囲内におさまるものが多く、またその平均値(中央値)は0.10(10%)の付近にある。しかし、比率のばらつきは大きい。
- 3) 5万石以上の藩について、領内人口(ただし飛地を除く)に対する城下町人口比率を求めると、大部分のものが0.05～0.14帯内におさまり、またその平均値(中央値)は0.10となる。したがって、このクラスの藩に至って、はじめ

て城下町の人口は領内人口の10%前後を占めるということが出来る。

4) 10万石以上の大藩になると、比率は10%付近に一層安定する。

5) 城下町人口比率がなぜ10%になるのか、また、比率のばらつきをもたらすものは何か、これらの解明が今後の課題となる。

(奈良大学文学部)

〔注〕

- 1) 矢崎武夫『日本都市の発展過程』1962, 290頁
- 2) 矢守一彦『幕藩社会の地域構造』1977, 220頁
関山直太郎『近世日本人人口の研究』1948, 233頁
前掲1), 143頁
- 3) 藤岡謙二郎『城下町の地理的性格に関する二、三の考察』(『歴史地理学の諸問題』1952), 44～49頁
- 4) 前掲2) 矢守, 245～258頁
- 5) 前掲2) 関山, 265～277頁
- 6) 『日本歴史大辞典, 別巻』河出書房, 1974
- 7) 木村礎校訂『旧高旧領取調帳』東北編, 1979.
関東編, 1969, 中部編, 1977年. 近畿編, 1975.
中国四国編, 1978. 九州編, 1979.
- 8) 参謀本部編『共武政表(明治12年)』(柳原書店復刻版, 1978)
- 9) 『統計集誌, 306号』1906
- 10) 膳所, 高取は『共武政表』に記載がない。長岡の人口は, 1,107人とあって, 明らかに誤記である。これらの旧城下町については明治19年の人口が不明であったので, 明治31年のものを用いた。
- 11) 前掲2) 関山, 235～236頁
- 12) 前掲2) 関山, 237頁
- 13) 前掲2) 関山, 235頁
- 14) 前掲1) 140頁
- 15) 前掲2) 矢守, 249頁
- 16) 前掲2) 矢守, 256頁
- 17) Alexandersson, G.: *The Industrial Structure of American Cities*, 1956

A POPULATION RATIO BETWEEN CASTLE TOWNS AND FIEFS IN EDO ERA

Mutsuo NISHIMURA

There were 222 feudal clans in Japan at the last years of *Edo* Era. The purpose of this paper is to find out a population ratio between castle towns and fiefs. “*Kyōbuseihyō*”, the first settlements and demographic statistics, and “*Kyūdaka Kyūryō Torisirabe Chō*”, the first taxation ledger by villages, were utilized to know the population of castle towns and fiefs. As the result of the calculation, an average population ratio between castle towns and fiefs was about 0.10, scattering the numerical value within the scope of 0.05 and 0.20. But the value is stabilized when the calculation is limited in large feudal clans.